

物語の円環

森見 登美彦

プロフィール
1979年奈良県生まれ。小説家。京都大学農学部卒業。同大学院農学研究所修士課程修了。2003年『太陽の塔』（新潮社）で第15回日本ファンタジーノベル大賞を受賞しデビュー。2007年『夜は短し歩けよ乙女』（角川書店）で第20回山本周五郎賞受賞。2010年『ベンギン・ハイウェイ』（角川書店）で第31回日本SF大賞受賞。2018年『熱帯』（文藝春秋）は第160回直木賞候補に挙がるなど著書多数。

少年時代、週末には家族で万博公園へ出かけた。

自然文化園の北口から入ってすぐに「森の舞台」という一角があつて、いつも我々はそこで遊び、母の用意してくれた弁当を食べたものである。その幸福な少年時代、強烈な印象を与えられたものが二つあつて、ひとつは「太陽の塔」であり、もうひとつが「国立民族学博物館」だった。当時の私にとって、太陽の塔は世界の中心に屹立する謎そのもの、国立民族学博物館は森羅万象を網羅した「驚異の部屋」といふべき場所だった。二〇〇三年に出版したデビュー作のタイトルが『太陽の塔』であり、同作に国立民族学博物館が登場することからも、影響の大きさをご理解いただけたらと思う。

小説家としてデビューして二六年経つ。

最新作『熱帯』は、自分にとって小説とは何か、物語とは何かという疑問そのものを小説にしてやろうと企てた作品である。構想に悩んでいた時期に出会ったのが『千一夜物語』だ。「シャハラザードが語る」という枠組みの中で無限に増殖していく物語群は、物語というものの生命力

を感じさせるし、その複雑怪奇な成立史にも心惹かれた。驚いたのは、『千一夜物語』の研究者でもある西尾哲夫先生が国立民族学博物館におられたことである。国立民族学博物館といえば少年時代の私を圧倒した「驚異の部屋」ではないか。自分にとって小説とは何かと思ひ悩んでいるとき、私は『千一夜物語』と出会ったのだが、その出会いは少年時代の思い出の扉を開いたわけである。運命を感じた私は西尾先生のもとへ取材に出かけ、なんとか『熱帯』を書き終えることができた。

二〇一九年二月、国立民族学博物館で西尾先生と対談イベントを開催した。

小雨の降る午後、久しぶりに国立民族学博物館を訪ねたとき、デビュー作『太陽の塔』から最新作『熱帯』へとつながる大きな円環が閉じていくように感じられた。伏線をさかのぼれば、三〇年以上前の少年時代へ辿りつく。ずいぶん長い時間をかけて伏線を回収したものだ。『千一夜物語』の成立史がひとつの物語であるように、『熱帯』の成立史もまた（きわめて個人的な）物語である。

月刊 みんなぱく

6月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
物語の円環
森見 登美彦</p> <p>2 ワーディ・ファーティマの人びと
——半世紀の変化をおって
縄田 浩志</p> <p>4 半世紀前の被写体女性に会う
河田 尚子・藤本 悠子</p> <p>6 衣装はカラフル、リサイクル、リバイバル
郡司 みさお</p> <p>7 装身具に見る生活の変容
遠藤 仁</p> <p>8 片倉もとこの人間像
片倉 邦雄</p> <p>9 「ゆとろぎ」の概念と片倉もとこ
西尾 哲夫</p> | <p>10 〇〇してみました世界のフィールド
屋根裏散歩者の夢想
佐藤 浩司</p> <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相
泣く子をだまらずアイヌのお化け
齋藤 玲子</p> <p>16 みんなぱく回遊
ガラス絵とガラスアイコン
三島 禎子</p> <p>18 シネ倶楽部 M
サーミを捨てサーミを生きる
——「サーミの血」
庄司 博史</p> <p>20 ことばの迷い道
ことばの藪知らず
吉岡 乾</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|